

文化財に「トリ」を求めて

考古学から見た「トリ」の話

今年「酉」歳。十二支の中でも皆さんには比較的馴染み深い動物だと思います。そこで考古学から見た「トリ」と日本人のかかわりについて紹介することにしましょう。

空を自由に飛び、日の出とともに朝早くから囀る鳥を古代の人々は神聖な動物だと考えていたようで、鳥の形をした木製品が弥生時代の遺跡から度々出土することがあります。



鳥形をした木製品

には夜明けを告げる動物として「ニワトリ」が大陸からもたらされ、神聖な鳥

事例の検討から当時の「ムラ」の出入口の門の上に並べられ、侵入者を見張り、「ムラ」の暮らしを守る聖なる動物と考えられていたようです。

また、古墳時代



鳥形をした木製品

として大切に扱い、古墳の埴輪にも鳥形のものが見られます。(今でも鶏を神の使いとする神社があるのはそのなごりでしょうか。)

時代が少し下がりますが、市内でも出土品の中に「トリ」に関連したものが

あります。信楽町宮町に所在する紫香楽宮跡の発掘調査では写真のような「鳥」形

の木製品が出土しています。

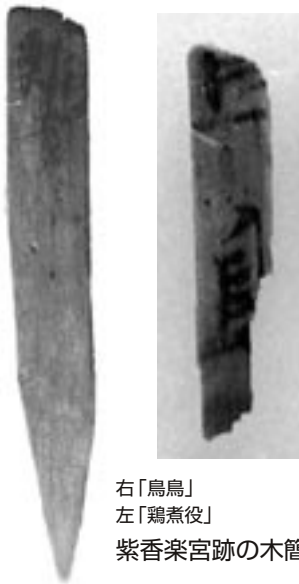
溝の中からたくさん出土していることから、

ともに出土していることから、祭祀用具として、神に対する

お供えとして神聖な「トリ」を

奉納したと考えられます。

またその一方で、奈良時代の人々は「トリ」が大変おいしい食物であることも知っていました。



右「鳥鳥」
左「鶏煮役」

紫香楽宮跡の木簡

出土した木簡には「鶏煮役」や「鳥鳥」などと書いてありました。

古墳時代には神聖な動物とされていた「鶏」もこの頃になると食材の1つになり始めたようです。しかし殺生を禁じた仏教の影響もあって日常的に食べるには至らなかったようです。

ある研究者の調査では江戸時代の農村風景を描いた「鶏」は大抵が雌雄一対であり、近代になるまで鶏の飼育目的が食肉や採卵でなかったことが報告され、江戸時代の終わりに浦賀沖に黒船が来航し、アメリカの初代領事として来日したハリスが食糧として新鮮な牛乳と卵を用意するよう幕府に要求した際もなかなか集めることができなかったというエピソードも残されています。

瀧樹神社ケンケト踊り



羽で飾った冠をつけて踊るケンケト踊り

頭に孔雀や雉・山鳥などの羽で飾った冠をかぶり、あでやかな衣装を身に着けて舞う踊り子の姿が印象的なケンケト踊りは、毎年5月3日、土山町前野の瀧樹神社の祭りで奉納されます。

ケンケト踊りは、延徳元年(一四八九)

に、この地域の豪族であった岩室氏と頼宮氏が田楽を奉献したのが始まりとされています。祭礼には、氏子である前野・徳原・甲賀町岩室の3地区が参加し、前野・徳原が4年に一度、岩室が隔年で

今年「酉」歳。トリにちなむ文化財を探してみました。民俗色豊かなお祭りに神聖な「トリ」が登場し、発掘調査においても古代の「トリ」が出土しています。酉歳にトリに関わる文化を調べながら、わが町を歩いてみてはいかがでしょうか。